

アンティマキ

調査団体名	アンティマキ	団体代表者名	村田牧子
設立年	2003(平成15)年	対応してくれた人の名前	村田牧子
団体URL	http://blog.goo.ne.jp/nihonkamoshika		
活動拠点	豊田市夏焼町ワカドチ383-5	調査員	蔵治光一郎、大島光利、森本徳恵
取材日	2014年12月5日	レポート作成者	森本徳恵

活動内容

周囲の野山で採取した草木で、染めものやリースなどを作る一方、環境や体になるべく負担の少ない素材を使った焼き菓子やパンの製造に携わる。直売所・どんぐりの里いなぶを始め、市街地のスーパーやまのぶ梅坪店などで販売するほか、豊田市とその近郊で開かれるイベントなどにも出店している。また、地元の体験施設・どんぐり工房では、毎月草木染めの講習会を開き、不定期に、焼き菓子やパンの講習会もどんぐり工房や市街地で開催している。他にも、地元の有機栽培の米農家を応援するために始めた「こめこなクラブ」では、山里に移住した人たちと田舎好きの都会人が集まって農作業を手伝っている。さらに、友人のユキさん(志工房主宰)とミキさん(Miki-Co-Labo 主宰)と組んだユニット「奥三河Three trees+」では、通信の発行やイベントでの出店協力などを行っている。「アンティマキ」は「まきおばちゃん」という意味。

キャッチフレーズ

草木染め「きさくにくさきぞめ」 焼き菓子・パン「易しく優しい焼き菓子とパン」

会のモットー(何を大切にしているか)

苦労はしないで工夫すること。草木染めを通じて、自然が生み出す美しさや不思議さを知ってもらうこと。手作りのよさ、面白さ、楽しさを感じてもらうこと。

設立から現在に至るまで変化したこと

京都で編集の仕事をしていた30代のころ、マクロビオティックの考え方に触れたのがきっかけで、田舎暮らしを志すようになった。12年前、先に田舎暮らしを始めていた両親の住む稲武地域に移住。ようやく夢がかない、草木染めとリースの工房「アンティマキ」を立ち上げる。8年前、家の改装を機に知人の勧めで菓子製造業の認可を取得。同時期に、大阪在住の友人のマクロビオティック料理講師を招いて、地元で講習会を開き、現在まで続けている。菓子製造業については、はじめは地元の直売所に少々卸す程度だったが、どんぐり工房での講習会や市街地のグリーンマン朝市での出店、インターネットによりネットワークが広がった。イベントでの出店や、焼き菓子やパンの講習会を開催してほしいという要望が少しずつ増えている。

連携している団体・専門家・自治体など

どんぐりの里いなぶ、green maman、(株)M-easy、スーパーやまのぶ、豊田市(おいでん・さんそんセンター)、愛知県交流居住センター(三河の山里だより)
奥三河Threetrees+のメンバー(天然石けんの志工房、コンフィチュールのMiki-Co-Labo)

山村再生や、その担い手づくりに関わる具体的な活動(例:小仕事づくり、山村・森林資源活用など)

昔は牛馬の飼料や肥料として大事だった雑草は、今では邪魔者としてしか扱われていない。草木染め講習会では、百姓の敵・雑草から美しい色が生まれることを知ってもらい、参加者の自然を見る目が深まることを期待しているという。講習会の参加者からは、稲武を訪れるきっかけとなり、田舎が好きになったとの声がよくあがる。ブログやフェイスブックでは、山村暮らしの豊かさや楽しさ、しんどさを知ってもらいたくて、発信を続けている。

現在直面している課題

アンティマキの商品は村田さんお一人で制作・製造しているため、供給量に限りがあることが問題。ただし、商品製造のそもそもの目的は、人々に手作りの楽しさを知ってもらうきっかけになることでもあるので、講習会に参加して、作り方を覚えていただきたいと思っている。

今後やってみたいこと

織物製作や土いじり、しばらく手がけていないナチュラルクラフトの制作などに取り組み、さらに田舎暮らしを楽しみたい。現在も行っているブログだが、もっと頻繁に発信していきたい。手軽に作れる、焼き菓子やパンのレパートリーをさらに広げ、市街地での講習会開催にも力を入れたい。

そのためにはどんな情報・人脈が必要か

これまで、green maman や株M-easy のメンバーと知り合えたことで、ネットワークが広がった。村田さんが田舎暮らしをこころざしたのは30代半ば。いま、その年代の人たちが、田舎暮らしに興味を持ち、実践もしている。彼らとのネットワークをさらに広げたい。

チームオリジナルの質問

<質問内容> 田舎暮らしブームの先駆けと思われるが、これから移住する人へアドバイスを。

<答え> 田舎に移住したい人は、田舎に馴染まなくてはいけないと意気込むと思うが、無理はしないほうがいい。そもそも、都会と田舎では文化が微妙に異なるということを頭の隅に入れておくべきだ。無理に馴染もうとすると、本来自分がしたかった田舎暮らしをあきらめざるをえないこともある。実際を言えば、昔と違って、田舎の人でも同じ暮らし方をしているわけではなく、同じ価値観を持っているわけでもない。実は田舎の付き合いがづらいと思っている地元民もいる。不愛想と思われたり、変人と目されたりすることを怖がらないほうがいいと思う。移住者が楽しげに面白そうなことをやっていると、意欲的な人は自然に集まってくる。

チームオリジナルの質問

<質問内容> 移住者を受け入れる側に要望があれば教えてほしい。

<答え> 「村に住んだらこうするものだ」と、押し付けることを控えてほしい。例えば、村のお祭りに関していえば、都会からの移住者はお祭りというものに参加した経験のない方も多い。だから、珍しがって喜ぶ人もいれば、警戒する人もいる。もちろん、別の宗教を信じている人もいるはず。そういうひとたちを一律に「郷に入れば郷に従え」とばかりに無理に引き入れることはしないでほしい。文化が違うかもしれないということを考慮したうえで関わりをもってほしい。

その他、伝えたいこと

田舎暮らしをしたと思った最も大きな理由は、田舎なら、自分の生活に必要なものができるだけ自分の手で作れると思ったから。味噌とパン作りに始まり、各種保存食作り、草木染めで古着の再生、昨年からは醤油醸造も始めた。米作りではハザ掛けを手伝ったり、休耕田での麦作もおこなったりした。もちろん今も、生活のほとんどは人の手による品でまかなっているが、ささやかでも、自分で作れるということが楽しいし、生きる自信につながると思う。

写真 村田牧子さん
(アンティマキ)



草木染めした生地
(中央の黄色はカリヤス染め)



焼き菓子
(素敵なお宅の窓辺にて)